

関西地域のオペラ活動2013

白石裕史

2013年の関西音楽界は、これまでの停滞から漸く新生に向かって舵を切った。その先兵となったのは、関西音楽界の中心であるフェスティバルホールの再開場である。1958年に誕生したフェスティバルホールは改築のため2008年末より休館していたが、工事が完工したため2013年4月、再開場した。

このホールの構造に少し触れて置きたい。客が足を踏み入れると、鮮やかな赤い絨毯が敷きつめられた大階段とロビーが待ち受けている。次いで、吹き抜け構造の空間を貫く長大なエスカレーターに導かれ、ホワイエに着く。そこは1階客席の最後部に繋がる。見降ろす舞台は、広い間口の横長で、壁面や天井などの形状は旧ホールと変わらない。客席は2700で、旧ホールと同じ。響きは明瞭で柔らかく、残響は満席時で1.8秒という。

こけら落とし公演はフェニーチェ歌劇場など海外勢を加え豪華だったが、それと対照的に開業記念式典で演奏された音楽は厳粛だった。下野竜也指揮大阪フィルハーモニー交響楽団が登場し、ベートーヴェン作曲の《献堂式》序曲を演奏した。この曲は、56年前、旧ホール開業式典で朝比奈隆指揮の関西交響楽団（現・大阪フィルハーモニー交響楽団）が手がけた曲である。

この演奏と新ホールの形態を合わせ総括すると、旧ホールの伝統を残し、受け継ぎ、次代への進化を目指す、という意図が明らかに汲み取れる。この方向性は、言わず語らず、関西音楽界の指標になり、浸透して行くことだろう。

それと関連して、オペラとは直接的な関係

はないが歌手や器楽奏者に関心が持たれているザ・シンフォニーホールは、2014年1月、朝日放送から滋慶学園グループの株式会社に引き継がれ、新体制で再スタートした。こちらも30年の伝統を引き継いで行く意向だ。もう一つ、小さな空間なりに存在感を維持してきたイシハラホールは、20年の歴史に幕を降ろした。大阪市内に立地した二つの名門ホールの帰趨は、そのまま大阪のもう一つの面を映している。

2013年の関西音楽界の舞台で特徴的だったのは、ワーグナーとヴェルディの生誕200年記念への参加だった。ワーグナーでは舞台は《ワルキューレ》（びわ湖ホール）だけだったが、各交響楽団は《ニーベルングの指環》抜粋、《ジークフリート牧歌》、《トリスタンとイゾルデ》から〈前奏曲と愛の死〉などを定期演奏会で取り上げ、関心の高さを示した。またヴェルディではオペラ《椿姫》（びわ湖ホール）、《シモン・ボッカネグラ》（いずみホール）、《仮面舞踏会》（関西歌劇団）、《オテロ》（河内長野マイタウンオペラ）が上演され、ハイライトやガラも花を添えた。

■ 関西歌劇団

春の定期公演は、ヴェルディ生誕200年記念と銘打った《仮面舞踏会》（6月）だった。この演目を手がけるのは3度目だが、規模が大きいだけに前回から12年の歳月を経ている。今回は藤原歌劇団の協力により、イタリアのデザイナーによる大規模な舞台装置、イタリアから持ち込んだ衣裳を使用し、1859年ローマ初演版に拠って上演された。この

舞台装置が凝っており、舞台前面に大きな楕円、舞台奥に小さな楕円の場が設けられ、両者の間を約10段の階段で結んだ立体的な構造だった。出演者は総勢約150人。歌手たちの歌唱は熱気に満ち、リッカルド・清原邦仁らの好唱がドラマを際立たせた。指揮：柴田真郁、演出：栗國淳、演奏：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団。イタリア語上演、日本語字幕付。吹田市文化会館メイシアター大ホール。なお、この公演に対して大阪文化祭賞奨励賞が清原邦仁に送られた。

秋の公演は「関西歌劇団第1回コンチェルトペラ」と題し、《椿姫》(11月)を上演した。コンチェルトペラとは、コンサートとオペラを組み合わせた造語で、今回はピアノと簡略化した舞台装置を使用した。この企画は関西の有望な新進を発掘する狙いもあり、イタリアの指揮者・ピアニストのダミアノ・マリア・カリッソーニを招き、彼のマスタークラスから2人を選び、主役に据えた。

この舞台では冒頭、白いドレスの女性が床に倒れ伏し、出演者たちも静止したまま、という状況から始まる。舞台下手からカリッソーニが登場し、客席に一礼してピアノを弾き、舞台が動き始める、という演劇的な才気のある手法を取っていた。新進の主役たちはピアノに導かれ好唱だった。演出：井原広樹。イタリア語上演、日本語字幕付。尼崎あましんアルカイックホール・オクト。

■ 関西二期会

主な公演は春と秋の二つ。春の定期公演はベッリーニ作曲《夢遊病の女》(5月)だった。声楽的に至難といわれて来ただけに、関西二期会では初めての取り組み。指揮にダニエーレ・アジマン、演出にカルロ・アントニオ・デ・ルチアという国際派をイタリアから招聘した。更に歌手も、主役エルヴィーノにジョ

ヴァンニ・ボッタを迎え、関西二期会側も主役アミーナに日紫喜恵美らヴェテランから新進までベスト・キャストを組み、遜色のない歌唱を繰り広げた。合唱団も登場人物たち同様、演技がついていたのは新鮮だった。演奏：大阪交響楽団。イタリア語上演、日本語字幕付。吹田市文化会館メイシアター大ホール。

秋の公演はモーツァルト《魔笛》(11月)だった。関西二期会は、この演目を過去7回上演したが、今回ほどユニークな舞台は初めてである。愛と徳に包まれたザラストロの世界は、半面強権的、閉鎖的だ。それと対置する夜の女王の世界は放埒だが、情愛は濃い。両者の外にいるパパゲーノの奔放な生き方に現代へのメッセージを託した作風だった。衣裳も舞台装置も斬新で、見る者の想像力を刺激した。演出はドイツの演出家ネリー・ダンカー、舞台美術も同じくドイツのデザイナーであるヤッス・ヤバラ。ともに新進で日本では初仕事。また両者がドイツと日本のハーフであることも関心をそそった。指揮はアーヘン市立歌劇場音楽総監督として活躍した北原幸男。演奏：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、合唱：関西二期会合唱団。ドイツ語上演、日本語字幕付。尼崎あましんアルカイックホール。この公演に対し、関西二期会に佐川吉男音楽賞が贈られることが決まった。

■ 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

びわ湖ホールは2013年10月、開館15周年を迎えた。琵琶湖畔の景観とともにホールの人気は高い。記念企画には15周年記念コンサート、オペラ・ガラ・コンサートなどとともに、子ども向けオペラ《泣いた赤鬼》(10月)も組み込んでいた。このオペラは、浜田廣介の児童文学を下敷きに、松井和彦が構成・作曲。大川修司の指揮でピアノ、チェレ

スタ、打楽器が演奏し、びわ湖ホール声楽アンサンブルが出演した。演出は岩田達宗。出演者たちは大きな身振りでコミカルに演じ、客席の子どもたちは心優しい赤鬼に大声で呼びかけるなど、大いに盛り上がった。この成功の陰には、声楽アンサンブルが2009年から遠く離れた地域の小学生を対象に《泣いた赤鬼》の巡回公演を重ねて来たという、オペラの裾野を広げる地道な活動があったことも忘れられない。中ホール。

この年のプロデュースオペラは、春はヴェルディの《椿姫》(3月)。このオペラはびわ湖ホールと神奈川県民ホールの二つの劇場、東京二期会、京都市交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団の三つの団体による共同制作である。演出はイタリアから招聘した新鋭のアルフォンソ・アントニオツィ。舞台は第2幕以後、暗澹としたムードに支配され、第3幕では倒れたヴィオレッタの前でもう1人のヴィオレッタが歌うという心理劇的な演出だった。舞台美術は、かつてのイタリア映画の巨匠たちが見せた感覚を受け継いでいるという見方もあった。指揮：沼尻竜典。イタリア語上演、日本語字幕付。大ホール。

プロデュースオペラの秋の公演はワーグナーの《ワルキューレ》(9月)だった。《椿姫》同様、二つの劇場と東京二期会、日本センチュリー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団の三つの団体による共同制作である。見どころ聴きどころが豊富な演出で、ワルキューレたちが活躍する第2幕はアクロバットの空中芸を避け、足が地についた個性的なパレードだった。若者ジークムントが生き別れた妹ジークリンデと出会う第1幕、大神ヴォータンが娘の戦士ブリュンヒルデを岩山に眠らせる第3幕では、選り抜きの歌手たちの丁々発止に観客は酔い熱狂した。この物語のテーマを、演出のジョエル・ローウェルスは「機能していない家族」と読み解いて

いる(公演プログラムによる)。この透徹した解釈も印象的で、祝祭年に相応しい豪勢な公演になった。指揮：沼尻竜典。ドイツ語上演、日本語字幕付。大ホール。この公演に対し、音楽クリティック・クラブ賞本賞が贈られた。

■ 大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス

2013年の公演はブリテン作曲《ピーター・グライムズ》(10月)だった。貧しい漁夫が、手伝いの少年の死に遭い、村人たちの非難を浴びる。だが真相はわからない。その過程で村の閉鎖性、人々の偏見などが緻密な演劇のように伝えられ、合唱もオペラハウス合唱団・学生選抜メンバー47人が威圧感を醸し出す。その息苦しさを、数多い間奏曲が和らげる。繊細な織物のような進行だった。指揮：高関健、演出：中村敬一、演奏：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団。英語上演、日本語字幕付。この公演に対し、三菱UFJ信託音楽賞が贈られた。

■ 兵庫県立芸術文化センター

恒例の佐渡裕芸術監督のプロデュースによるひょうごオペラプロジェクトは、2013年はロッシーニの《セビリヤの理髪師》(7月)だった。いつものように上演期間は8日間、開演は午後2時で、いずれも満員。今回は日本語上演に踏み切っていた。冒頭は序曲とともに幕が上がり、仮面姿の道化が舞台にセットを組むという洒落た導入部だった。以後はギャグの連発、爆笑の渦に包まれた。指揮：佐渡裕、演出：飯塚功生、ひょうごプロデュースオペラ合唱団、兵庫芸術文化センター管弦楽団とチェンバロ。同センター KOBELCO 大ホール。

■ みつなかオペラ

2013年の公演はベッリーニ作曲《カプレーティとモンテッキ》(9月)だった。前年から始めた「ベッリーニ“ベルカント・オペラ”シリーズ」の2回目。この作品はシェイクスピアの演劇《ロメオとジュリエット》に知名度では譲るが、旋律の美しい魅力は何ものにも代え難い。この舞台では歌手の演技や剣技にも細かく配慮され、皇帝派と教皇派を赤と青の色彩で区別し、舞台装置も出演者たちが処理するなど、手際が良かった。指揮：牧村邦彦、演出：井原広樹、合唱指揮：岩城拓也、演奏：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、合唱：みつなかオペラ合唱団。イタリア語上演、日本語字幕付。川西市みつなかホール。

■ 堺シティオペラ

2013年の定期公演は、グノー作曲《ロメオとジュリエット》(9月)だった。このオペラは、シェイクスピアの演劇と同じ5幕仕立て。内容もほとんど省略せずに生かし、グノーらしい甘美で品のよい音楽を添えている。主演ジュリエットに、関西での活躍が著しい古瀬まきを、ロメオにフランスから招聘したブルーノ・ロバ。短い人生をひたむきに愛に生きる好演だった。舞台装置に一工夫があり、切り裂かれた二つの壁を組み合わせ、その鋭い裂け目を強調して、両家の反目を象徴した。この装置は仮面舞踏会やバルコニーの場面にも使われ、運命の重苦しさを絶えず意識させた。その半面、抒情的な音楽を引き立てる狙いもあったようだった。指揮は関西ではなじみのあるヤニック・パジエ、演出：栗國淳、合唱指揮：岩城拓也。演奏はザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、堺シティオペラ記念合唱団、法村友井バレエ団。イタリ

ア語上演、日本語字幕付。堺市民会館大ホール。

■ いずみホール

いずみホール・オペラ2013は、ヴェルディの《シモン・ボッカネグラ》(6月)だった。このオペラは貴族と平民の権力争いと家族の関係が入り乱れ、分かりにくいなどの理由で1815年の初演は不評だった。24年後に改訂され、また指揮者クラウディオ・アバドによって評価され直すという経緯がある。それだけに今回は出演者が精選され、主演シモン・ボッカネグラの堀内康雄、その娘アメリア・グリマルディの尾崎比佐子が好演。脇に花月真、松本薫平、青山貴、萩原寛明ら演技にも優れた歌手を揃え、迫力に満ちた舞台を繰り広げた。舞台は、ホールの機構を生かしたセミ・ステージ形式。演出の栗國淳はオペラをチェスのゲームに見立て、裏を白と黒に塗り分けた駒を動かし、舞台に洒脱なアクセントをつけていた。このオペラのプロデュースと指揮は河原忠之であり、彼がすべてを取り仕切っていたようだ。彼は藤原歌劇団の公演でこのオペラを経験しており、コレペティトゥアの第一人者だけに抜かりはなく、新鮮な好演にまとめあげた功績は大きい。演奏：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、同合唱団。イタリア語上演、日本語字幕付。いずみホール。

■ 河内長野マイタウンオペラ

河内長野マイタウンオペラは、河内長野市立文化会館ラブリールホールを基地に、同市文化振興財団がもう21年手がけてきた事業である。経営の困難なオペラにも拘らず真っ向から取り組んでいるのは、オペラが開館当時のシンボルだったからである。オーディショ

ンから練習、そして本番に至る制作は、ラプリーホール主導で行われている。芸術監督、ソリストにはプロ歌手を起用し、合唱団は地元のアマチュアで組織、演奏はピアノで代替する。2013年は「マイタウンオペラ」1本と、「マイタウンオペラ・小ホールシリーズ」2本を上演。練習では3本が同時進行し、他に類例を見ない現象だと招聘した演出家を驚かせたこともあった。

2013年の小ホールシリーズは、プッチーニの《トスカ》(2月)とヴェルディの《オテロ》(5月)だった。《トスカ》は音楽監督・ピアノが服部容子、演出が中村敬一、トスカは地元出身の平野雅世が務めた。《オテロ》は指揮：船曳圭一郎、演出：奥野浩子、ピアノ：青山洋子、オテロには千代崎元昭を招いた。もう一つのマイタウンオペラでは、マスカーニの《カヴァレリア・ルスティカーナ》とプッチーニの《ジャンニ・スキッキ》を“豪華2本立て”と銘打って上演した。破天荒な組み合わせながらスタッフ、キャストは実力派で固め、音楽監督：牧村邦彦、指揮：井村誠貴、演出：岩田達宗。出演は関西歌劇団と関西二期会の歌手が務めた。演奏は大阪交響楽団。いずれもイタリア語上演、日本語字幕付。ラプリーホール大ホール。

■ VOC (Vivava Opera Company)

2013年の公演は、ヘンデル作曲《ロデリンダ》(9月)だった。初演が1725年のロンドンで、彼の絶頂期だっただけに、オペラも格調が高い。物語はイタリアの王家の権力と恋をめぐる争い。バロック・オペラの常で、人脈は複雑を極めるが、最後に清楚なロデリンダ(老田裕子)が救われ、邪恋のグリモアルド(清原邦仁)は窮地に陥る。だが台本は、彼に寛容の手を差し伸べ、また人の上に立つ王の心得を暗示した結末を用意してお

り、後味が良い。歌もダ・カーポ・アリアなどに感情が表現され、古楽器による管弦楽が舞台を支え、典型的なヘンデル・オペラを伝えた。ただ小さな演奏団体なので費用を切り詰め、衣裳は手作り、背景や字幕はパソコンを活用して整え、舞台裏は涙ぐましい苦闘ぶりだった。指揮・演出は大森地塩。この公演を最後にVOCはヘンデル日本初演シリーズを終え、活動を停止した。手がけたオペラは《ロデリンダ》など9作品で、小団体がよくぞここまでと感嘆せざるを得ない。客も増え、寄付も集まるようになった時期だけに惜しまれる。最後の観客は約500人(満席)だった。イタリア語上演、日本語字幕付。伊丹アイフォニックホール。

■ 帝国ホテルオペラシアター

オペラを鑑賞したあと、ホテルのシェフたちによるフルコースのディナーを楽しむ。いかにも大阪らしい道楽的な企画である。今回で9回目だから人気はある。演目はヨハン・シュトラウスの《こうもり》(4月)。装置はないが、関西の実力派のオペラ歌手たちが姿を見せ、軽快な歌唱や重唱を聞かせ、ナレーターが繋いでいく。構成・演出は栗山昌良。演奏は瀬山智博指揮の帝国ホテルアンサンブル、同ホテルオペラシアター合唱団。日本語上演、日本語字幕付。帝国ホテル大阪。

■ 日本オペラプロジェクト「夕鶴」

日本オペラプロジェクトは、過去《夕鶴》《赤い陣羽織》など多くの日本製のオペラが関西で創作・初演されたことに因み、関西から再び日本のオペラを起こそうという運動体である。音楽評論家・日下部吉彦氏が発起人となり、兵庫県立芸術文化センター、大阪音楽大学、大阪アーティスト協会が協力して形

を整え、日本のオペラ再起公演第1作を《夕鶴》と決めた。日下部氏は「日本のオペラは関西を基盤にして広がった。主導権は東京に移ったが、関西のパワーでキーポイントを握って行きたい」と記者会見で話していた。

《夕鶴》の初演は1952（昭和27）年1～2月、大阪朝日会館だった。原作：木下順二、作曲：團伊玖磨。出演は原信子、大谷洸子、木下保、柴田睦陸ら藤原歌劇団、演奏は團伊玖磨指揮の関西交響楽団。この公演は大きな反響を巻き起こし、日本人が手がけた最も優れた創作オペラと称えられ、毎日音楽賞、山田耕筰音楽賞などを受賞した。関西では思ひ出深い記念碑的なオペラである。

新しい《夕鶴》は2013年3月、兵庫県立芸術文化センター阪急中ホールで上演された。つう：並河寿美、与ひょう：西垣俊朗、運ず：晴雅彦、惣ど：田中勉ら関西勢。指揮：牧村邦彦、演出：岩田達宗、演奏はザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団で、関西の実力を網羅した構成だった。並河はドラマティックな発声を避け、歌唱も挙措もおやかな風情で通し、好演。他の人物たちも所を得た演技・演唱だった。総じて言葉が明瞭だったのは、ホールの構造に負うようで、総じて新鮮な《夕鶴》になった。

■ 新国立劇場「高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」

オペラ鑑賞教室6度目の2013年は、日本のオペラの代表作、團伊玖磨の《夕鶴》（10月）だった。上演前、沙幕越しに見える雪の舞台に高校生たちは興味をそそられたようで、オケピットも覗き込んで賑やかな声をあげていた。物語が進むと、出演者が何を歌ったのかを隣席に尋ねるケースが増えた。日本語上演だが、歌唱に慣れていないと戸惑うようだ。瞬時にテロップが入るテレビに慣れた身には、異次元的な体験だったかも知れない。アンケートでは「和の話と、オペラという洋のものを合わせ、楽しむことができた」と神妙な回答があった。指揮：石坂宏、演出：栗山民也、演奏：大阪フィルハーモニー交響楽団。児童合唱には地元尼崎の小学生たちが出演。尼崎あましんアルカイックホール。

お知らせ

長く本欄の執筆を担当してこられた白石裕史先生は2014年9月25日、83歳で逝去され、本稿が遺稿となりました。ご冥福をお祈りし、あわせて読者の方々の長年のご愛読を深謝いたします。